

加藤隼戦闘隊 ビルマ慰霊団 に同行して 旅行課 近藤節夫

□ 22名の元勇士と「涙の行進」

ラングーン郊外はタモエ日本人墓地から始まった。
エンジン音、轟々と隼は征く、雲の果て……勇ましい戦隊歌の間にも嗚咽とすすり泣きの声がきこえてくる。感激のシーンの幕あけだ。

私は、あの加藤隼戦闘隊（飛行第六十四戦隊）の二十二名の元勇士の方々にお伴して本年一月このビルマの地を訪れた。ラングーンのミンガラドン空港に我々の機が滑り込むと同時に、目を真赤に泣きはらした人、バスで市内へ向う道すがら当時の懐かしい想い出を少しでもかき出そうとオンボロバスから身体を乗り出しカメラをとりまくっている人、まばたきもしないでじっと外を見つめている人、そして冒頭の慰霊祭でこの日、感激はその極に達した。ビルマ到着のその日から私たちの

慰霊団は、俗に「涙の行進」となった。元第五飛行師団参謀長であった群馬の鈴木さんもすでに七十二才をかぞえ終戦時には、青年戦隊長だった熊本宮辺さんも五十の坂を越して久しい。とはいえ、そうそうたる顔ぶれの一行と私は、その日思い出も深いインヤレー湖（当時はビクトリア湖）畔のホテルで第一夜を明かした。

□ 二年前から周到な準備

当慰霊団の企画にあたっては二年前に当社になじみのある三軒茶屋に住む西沢さんから話があり、協力を得て漸く具体化へこぎつけた。私は昨年、単身ビルマへ飛び、ビルマ駐在鈴木大使や、ビルマ航空関係者に直接逢い、この計画を十分説明し、協力を依頼した結果、好意的な回答を得た。

主旨が主旨だけに、物見遊山の観光旅行と違って、周到な準備が必要である。が、難問が山積していた。この国はつい二年前まで鎖国状態であったために受入施設が十分ではなく、ほとんど観光団が訪れていない。また旅行社が日本にないたため連絡をとりにくい。加えて資料がとぼしい。暑さも厳しい等々……。処女旅行につきものの悩みはあったが、むしろ逆にこういう昔に近い状態こそが、こういった慰霊団の背景として全体のムードを盛り立てるのに役立った。

□ ビルマ四か所慰霊祭

ビルマでは、前述の首都ラングーンのほか空中戦も華々しかったメイクティラ、そして軍神加藤建夫少将が出撃され、そのまま帰らなかった前進基地アキャブの三カ所で慰霊祭を行うことにしていた。

私たちは到着の翌一月十八日、特別機でアラカンの地アキャブへ飛んだ。



アキャブ海岸から加藤隊長戦死の沖合を臨む

ここで亡き加藤戦隊長（昭和十七年五月二十二日戦死）はじめ、多くの英霊をとむらうためである。

離陸後間もなく、機内では「皆様お早うございます。本日はビルマ航空を善用いただきまして有難うございます」「上手な日本語だね」の声が出るのも当然、私のアナウンスである。機内はなごやかな空気であふれている。

この特別機にも我々は事前に無理な注文をつけた。アキャブ上空で旋回しながら低空飛行をやってもらうことだったが、ききとけてもらえ、右に、左に、カメラをもった一行は、ベルトもしめずに機内を動き回った。アキャブには順調に着陸した。

□ ベンガルの海へ空から花束

近くの寺院ではビルマ僧侶三人を始め、すでに慰霊祭の準備がなされていた。しかし、一行の希望で慰霊祭は、加藤戦隊長が戦死されたベンガル湾をのぞむ海岸に移された。ここでも日本からわざわざ持って行った心づくしのお供え物に、読経、焼香、戦隊歌の合唱と一通りの慰霊を済ませ、各人それぞれ思い思いの願いを、祈りをこめ、南海の太陽のもと、今や戦乱のカケラをうかがうすがもなこのベンガルの海に向って、花束やお酒を亡き戦友に届けとばかり投げかけた。アキャブ空港長を始め、特別機のスチュワーデスを含むビルマ航空関係者、地元の有志等多勢に暖かく見守られるなかでどここおりなく慰霊祭を挙行することが出来た。

さて三日目、私たち一行はラングーンからメイクティラへ飛んだ。ここは航空基地として旧日本軍のビルマ作戦上、忘れることのできない中部ビルマの町だ。（次号へ）

海外随想記

□メイクティラで最後の慰霊祭

ビルマ作戦上は忘れることのできないメイクティラの町は、今やビルマ空軍基地として使用され民間機の発着は認められていない。日本を発つ前、マンドレーから車で南下する以外に方法はないと考えていたのだが、私たちの熱意が通じたのか、離日直前になって極めて好意的な返事がきた。空軍基地の使用は無理だが、その日特別機が近くの空軍練習場へ臨時に着陸してくれるというわけだ。

一行は、メイクティラにそれぞれの感慨を抱いているようだった。写真の撮影を許されないうちに、二台の小型トラックに乗せられた私たちは、砂ぼこりを立てながら、強い直射日光をささざるものもない空軍基地の滑走路傍で数人のビルマ人に見守られながら慰霊祭を行なうことにした。あたりには、いまだに生々しい砲弾のえぐれた跡、掩体壕（えんたいごう）飛行機を敵の攻撃から守るため作られた遮蔽物（かくれもの）が残されており、鈴木さんの祭文につづく宮辺さんのリアルな当時の戦闘状況解説は、時こそ移ったが、ほとんど当時と変らない状況で同じこの地の上空戦闘だけに、改めて一行に当時のいまわしい想い出をよみがえらせたようだ。その昭和十九年一月十五日の戦闘は一度に五機の隼を失なった最悪の日であ

加藤隼戦闘隊 ビルマ慰霊団 2 同行して

旅行課 近藤節夫



（メイクティラの朝市は昔のままに）

ったが、千葉から参加した法京さんのお兄さんは痛ましくもその犠牲となられた。この日の慰霊祭は回を重ね本慰霊祭で最高の盛り上りをみせた。これまでも、涙また涙の連続であったのだが、ここへ来て感きわまった一行のほとんどはカメラをとる気になれずこみあげる涙に深々と頭をたれ、しゃくりあげるばかりだった。この最後の慰霊祭を終えた後、一行の顔には永年の念願と責任を果たしたという気持の顕れであらう、はっとした安堵の色がみえた。

□最大級の厚意に感激

私たち一行は、幸いにして予定どおり三カ所で慰霊祭を行ない、しかもこれまででわだかまっていた気持を十分晴らすことができた。五日間のビルマ滞在中、ビルマ軍をはじめビルマ国民から思いもかけない暖かい歓迎をうけたのだが、それはこれまで訪ねたいくつかの慰霊団がうけたことのない最大級のものだった。

アキャブから帰った一月十八日夜、私たちのもとへ、ビルマ政府内務副大臣チッキン大佐の迎えの車がきていた。私たち一行のために特別に迎賓館で晩餐会を開いてくれるのだ。私たちが厳しい警戒の迎賓館へ着くと、民族衣装ロンジー姿の大佐は、玄関先で全員を暖かく迎えてくれた。私たちは厚意に甘え、大いにリラックスして、大

佐をはじめ政府高官の人たちと語りあった。日本の陸軍士官学校に留学したチッキン大佐の話は、ほとんど日本人気質とか大和ダマシイであった。時のたつのも忘れ、私たちは大いに語り、大いに唄った。そしてこれは、全ビルマ紙に写真入りで大きく報道され、私たちの訪ねは在留邦人のみならず全ビルマ人の知るところとなった。

□来年もビルマ慰霊団を計画

本慰霊祭参加者の多くは相当な年輩であり、太平洋戦争を戦地で生き抜いてこられた勇士ばかり。私にはなかなか荷の重い仕事ではあったが、二年近い準備期間のうえに、漸く成功裡に責任の一端を果たすことができた。しかし、これにはビルマの人たちの暖かい理解と協力を見逃すことはできない。

帰国後、これがかきつけで、法京さんは実兄の遺体を收容された方が判明し対面するという副産物をもたらした。私は、今後も続く一連の慰霊団計画の過程で、こういう輪がどんどん拡がっていくことを望む。私たちにとってこうした地道で意義のある旅行企画は初めてのケースだったが、この成功を足がかりに、現在、明年一月を期して再びビルマ慰霊団派遣の計画を進めている。多少なりとも戦争にかかわりあいを持った方々の理解とご支援をいただければ幸いである。

（終り）